

論文の和文要旨	
論文題目	日中両語における取り立て表現の対照研究 ——「だけ」「しか」「ばかり」 と“只”“净”を中心に——
氏名	張 建 華

取り立て助詞は中国人の学習者にとって、学習上の難点の一つである。特に、「だけ」「しか」「ばかり」のような類義語などは、それぞれの意味がどのように違うか、どのように使いわけをするのかは、学習者を悩ませる問題である。このように日本語教育の現場において、その解決が強く求められている問題であることから、これを少しでも解決できればというのが、本論の目的である。

本論は発話の意味の研究の立場から、寺村秀夫(1986, 1991)の「前提」「影」と「含意」の考えをとりいれ、「だけ」「しか」「ばかり」における意味の相違は「影」に反映する形が異なると考え、それぞれの生じせめる「影」がどのように違うかを追及することによって、「だけ」「しか」「ばかり」の基本的な意味を明らかにしようとするものである。その研究方法としては、本論は多量の実例をもって考察するという方法をとっている。その理由は、まず一つは、「影」にある形を究明しようと思えば、文脈の中で観察しないと分からないからである。もう一つは、「だけ」「しか」「ばかり」のような使用範囲が広いものに対して、作例だけでは、その基本的な意味を明らかにするのは不可能だからである。また、「だけ」「しか」「ばかり」における研究は、作例か少量の用例によるものが、限界があるといった理由で、本論は多量の実例で検証するという方法を取ることにしたのである。

なお、本論では、中国人の学習者の立場に立って、「だけ」「しか」「ばかり」のようなものは、中国語ではどのように対応するのかについて、すこしでも、明らかにできればと思い、対照研究という方法も取り入れた。

本論は、以上の理論と方法によって、「だけ」「しか」「ばかり」について考察した結果、次のいくつかのことが明らかにになった。

1、「だけ」はそのつく名詞にさしだされる物や人が、なんらかのまとまりをなすものを全体とする部分としてとらえられていることを表す。例えば「箱にはりんごだけ入っている」という文でいえば、りんごが他の同類のもの、つまり、みかんやかきなど、他の果物とのセットをなし、それが全体となって、りんごがその部分としてとらえられているのである。この部分性という「だけ」の一般的な特徴は、「背中だけ陽に焼けた」「日曜日だけ会社を休む」などの文が、それぞれ「体全体」や「一週間（月、火、木、水、金、土、日）」を全体とした部分として「背中」や「日曜日」がとらえられていることを見れば明らかである。全体に当たるものは、さまざまであっても、すべて一般化すれば、全体と部分の関係がなりたっている。

2、「ばかり」は、ある範囲のなかに、その「ばかり」のつく名詞にさしだされるものが目立って多い、あるいは、それによって満たされていることを表す。「箱にはりんごばかり入っている」といえば、箱という範囲の中にもりんごが満ちていて、結果としてその他のものが入っていないか、ほとんど入っていないということになるのである。この「ばかり」の基本的な特徴は、「この一週間パンばかり食べている」という文でも、一週間、一日三回の食事の時に食べる対象という範囲がパンによって満たされているという形でも現れている。

また複数が「ばかり」の特徴としてあげられることがあるが、「箱にはりんごばかり入っている」という文において、りんごが複数であるのは、りんごが固体であり、箱という範囲をみただけには、それが複数でなければならないということである。もし、りんごのような固体ではなく、固体をなさないもの、ガスや水といった、気体や液体の場合は、もちろん、複数にはならない。「この一週間パンばかり食べている」という文でも、たしかに、パンは複数であろうが、それは「たべる」という動作が、対象を消滅させるという結果を含む動作であるからであり、「ばかり」の意味と直接には関係しない。「この一週間妹にばかり会っている」という文であれば、たとえ動作は反復であっても、当然、その対象である妹は複数ではない。それは「会う」という動作の性格による。

また、動作の複数性と「ばかり」がむすびつけられることもある。たしかに、「この一週間パンを食べている」という文も動作の反復を表すことができるのだが、「ばかり」を入れたほうが、その意味がよりはっきりしてくるということはある。しかし、「ばかり」がなくても、動作の反復を表現することができるのであれば、やはり「ばかり」自体が動作の反復を表現しているわけではないのだろう。「授業中窓の外ばかり見ていた」という文では、「授業中見ている」という動作の対象がほとんど窓の外であるということを表しているのだが、その動作は、断続的に続いていたとしても、反復の動作ではない。結局、「見ていた」とか「食べている」などの動詞が動作の継続や動作の反復を表していることによるのであって、それぞれにおいて、「ばかり」が動作の反復を表したり、表さなかつ

たりするというのは、おかしな考えである。どちらの場合も、「ばかり」は、「ばかり」のつく名詞にさしだされるものがある範囲を満たしているということを表しているのであって、その範囲が「見ていた」や「食べている」などの動詞によって設定されると考えたほうが自然であろう。「彼はパンばかり食べている」という文でも、「この一週間」のことであれば、動作は反復であるが、「食事中」であれば、動作は反復とはいえない。後者の場合では、食事中に食べる対象が、野菜や果物でなく、ほとんどパンでしめられているのである。

3、「しか」の場合は、「箱にはりんごしか入っていない」という文でいえば、もし、りんごという物が話し手の価値的な基準に照らして、価値の低いものとして評価されている場合、価値的な評価は好きか嫌いかを基準としていて、それは、欲しいとか、欲しくないとか、あるいは、食べたいとか、食べたくないとかといった、それに対する話し手の実践的な態度を引き起こす。したがって、「箱にはりんごしか入っていない」という文は「だから、いらない」などの文と、原因・結果の関係を結ぶ。さらに、「箱にはりんごしか入っていない」という文は、その原因をほのめかす。すなわち、「彼が箱の中のみかんを全部食べてしまった」などの原因がほのめかされていて、その原因から必然的に引き出される結果を、「箱にはりんごしか入っていない」という文が表すのである。このように、「しか」は「しか」をふくむ文にさしだされる出来事が、その評価もふくめて、他の出来事を原因として必然的に生じてきたり、また、他の出来事を、その結果として引き起こしたりするという関係の中に存在することが、その特徴なのである。「だけ」と同じような意味を表しているように見える場合でも、この点において、「だけ」と決定的に異なるのである。

また、「しか」のつく名詞のさしだすものが、価値的に低いものとして評価される場合があるが、それは「しか」が名詞につく例の一部である。価値的な評価と関わらない例は、いくらでもでてくる。したがって、これを「しか」の一般的な特徴ととらえることはできない。

4、中国語の副詞“只”について観察した結果、「だけ、しか」のように、つく単語にある「影」を生じさせる機能をもっているが、たいてい、限定されたものは排除されたもの、あるいは対比となるものとともに、文に明示される場合が多い。これは、“只”の接続的機能にもかかわりがある。「しか」は“只”のように接続的機能をもっていないが、「しか」を含む文にさしだされる出来事が、他の出来事との、条件付け、条件づけられるという関係の中に存在することは、内容的には“只”に近い。“只”は数量を限定する場合は、ある基準となる数量の存在が暗示され、それと対比して、“只”のつく数量がそれより下回る。したがって、数量の少ないという意味をさししめすことになる。この意味でも、「しか」が“只”に近い。「だけ」は全体とする一部の量をさししめすものであるから、“只”と異なっている。

5、副詞の“浄”は、ある範囲の中に、“浄”のつくものにさしだされるものが目立って多く、あるいは、それによって満たされるという意味があり、「ばかり」に似ている。しかし、“浄”は感情的な評価性をもっている副詞で、たいてい、評価性のある語につく。特にマイナスの評価性のある語につくことが多い。また、評価性に関するニュートラルな語が“浄”につくと、好ましくない、不満だという否定的評価がつきまとう。これは「ばかり」には見られない。